

# イギリス垣間見記



An account of a glimpse in U.K.

松井良太郎

MATSUI Ryotaro

株式会社ケーシック/参与



縁は異なるもので、ヒョンなことから娘がイギリス人と結婚し、彼の地に住み子供をもうけた。この孫に会うためにイギリスに行く機会に恵まれることとなった。イギリスに行くときは妻との1泊または2泊の小旅行をするが、この移動は列車を利用し、娘がそれぞれの地の宿泊所であるB & B (Bed & Breakfast)を予約してくれるので、ツアーでは味わえない、ゆったり気分で身近にイギリスを観ることができ、まことに楽しいかぎりである。

以下は、聴き取り、確認する英語力がない故に、彼の地での独りよがりのイギリス垣間見記である。

## 1. 市民の日常生活に関して

夏の日暮れはロンドン、ポーツマスでは午後9時すぎ、エディンバラ、インヴァネスでは午後10時すぎになる。家々の窓にはシャッターはなく、どの窓もほんのりと暗い。多くの家庭はスタンドなどで明かりをとっており、間接照明がほとんどである。ほの暗く新聞は読みづらい。しかし気分はゆったりと落ち着く。どの家も光源は白熱電球で、台所には蛍光灯が使用されているようだ。

娘夫婦を見ている家具はとても少ない。だから何本ものタンス類が部屋を占領することもなく、部屋はほぼ100%活用できる。旦那はコンピューター技師であるが、通勤はいつもラフな服装である。職種にもよるのだろうが、ロンドン以外のイギリスでは概してラフな服装での通勤者が多い。夏でも決して暑くないから日本のように夏用のスーツは不要である。さらにイギリス人は男女とも服装は質素な人が多いようで、多くはジャンパーを羽織っている。これは昔から言われるように「外出には傘を忘れない」ほど、にわか雨が降ることとも関係しているのではないと思われる。ジャンパーは傘がなくとも十分に対応できるし、少々の雨ではイギリス人は傘なしでも少しも慌てずに泰然としている。

子供は幼児のときから別室で1人で寝かされている。泣いてもその都度あやしには行かない。「そのうち泣き止むだろう」と言っている。1歳3ヶ月の孫の場合、8時半頃に1人で寝かされたとき、どのように眠ってい



写真1ーパブ(オックスフォード)



写真2ー連なる住宅(ポーツマス)



写真3ー4戸建ての住宅(アイアンブリッジ)



写真4ーイギリスの家庭の庭(パースのB&Bの庭)

るのか見たくてドアの陰からそっと覗き見れば、彼女はまだ眠っておらず、筆者に気付いてベッドに立ち上がった。こちらをジッと見ていたが泣きもせず、筆者がドアから離れた後もコトコト音もなかった。これには感心した。自立心はいやでも備わってくるだろう。親も子供が幼児の頃から子離れができています。

列車、地下鉄、バスとも駅には次駅の駅名標示も案内放送もない。バス停ではその停留所の名称が標示されていない所が多い。あっても車内からは判読しづらいほど小さな文字で、バスが今どこに停まっているのかも分からない。それでも乗客は自身で判断して降車し、何らトラブルもない。「自分のことは自分で!」との自立心がベースになれば社会全体で定着しないシステムであろう。

町に自動販売機はない。ビールなどのアルコール類はパブで飲む。鉄道駅でビール類を売っているのは駅構内のバーだけである。バーと言ってもオープンスペースの一角にカウンターがあるだけだが、駅のバーはどの駅にもあるというものではない。そしてそこで買うビール類

は「そのエリアから出て飲んではいけない」と表示されている。日本のようにどこでもビールが買えて、好きなところで飲めるというものでは決してない。従って駅でビールを買って列車への持ち込みはできない。車内販売が来たときにビールを購入できる。しかしこのビール、冷えていない場合が多い。

都市部では自宅にガレージを持っている人はほとんどいない。すべてが路上駐車。前の道路の空いているところに適当に駐車しており、縦列駐車があちらこちらで見られる。人や車の「ポツと出」がないから車の運転は飛び出しに注意しながらではなく、縦列駐車している横をすいすいと走っている。

ロンドンなどの大都市の中心部は別として、押しボタン式信号がある横断歩道では、歩行者がボタンを押せば信号はすぐに変わり、待つことなく道路を横断できる。しかし青信号はその人が渡り終える程度の時間しかない。すなわち車はほんの少し停車するだけである。わが国では歩行者がボタンを押した時点から、青信号になるまで待たされる。渡り終えても信号現示はそのまま。1人しか渡らないのに車は数分待たされるのは考えてみれば合理的ではない。両国のこの交通管制の違いは歴史的な背景があるので一概に評することはできないものの、合理性と歩行者優先思想の違いは歴然としている。

## 2. まち並みなどに関して

都市部では1戸建ては非常に少ない。2戸建て、3戸建て、さらには「長屋」建てが多い。ポーツマスのドーバーロードでは、それぞれ



写真5ービクトリア スパ ロッジ(B&B)(ストラトフォードアポンエイボン)





■写真6—ハーティンバーの家々が軒を並べる目抜き通り(チェスター)



■写真7—イギリスの田園風景(アランデル近郊)



■写真8—セントアイヴス(港は引き潮)(コーンウォール地方の景勝地のひとつ)

全ての道路名称が記されている道路地図を利用する。住居番号はこの道路に面して左右に奇数、偶数の順に付けられているから、道路の位置さえ分かればお目当ての住居はその番号順に辿っていけばよい。住所表示は例えば95 Dover Roadになる。

わが国では“〇〇さんが住んでいる家”と住んでいる人が第一義となる。西洋全般のことかもしれないが、イギリスでは建物が第一義で、住んでいる人がたまたま〇〇さんであって一過性のものとの印象を受ける。これは住宅の素材が石、レンガまたはコンクリート(ブロック)であって、住宅の耐用年数が人間の寿命よりはるかに長く、このことが住宅を購入しても古きことに悦びを見出し、建物をむやみに取り壊すこともなく、結果としてまち並みも歴史的に保存

されてきたのだろう。したがって住宅の売買に際しても、その住宅がいつの時代のものが重要なファクターであるものの本に書いてある。このことはわれわれ日本人からすればその精神構造を異にするようで、古き良きものへのノスタルジアが国民共通の意識・認識であるようだ。国民感情の底辺がこのようなものであるからイギリスではナショナルトラストがまことに盛んであり、ここから派生したランドマーケットラストも国民の支持を得ていることに合点する。このランドマーケットラストは多くの古い施設(歴史的に価値のあるものもないものも区別なく、ただ古くて朽ち果てていくもの)を買い取り、当時の古色蒼然たる風情に復元し、広く国民に廉価な滞在宿泊施設として開放しているようだ。

古い家の建て替えは原則的に禁止されているようだ。B&Bを利用して、建物は古いながらも管理がよく、違和感はない。ストラトフォードアポンエイボンのB&Bではヴィクトリア女王が泊まった部屋が今も当時の雰囲気をもって保存され(と女主人は言う)利用できる。宿泊する者としてはうれしくなってくる。

冬でもイギリスの室内は寒くない。パネルヒーターが原則的に各室1つずつ、就寝時を除いてほぼ1日中点けてある。このパネルヒーターは決して熱くなく、シャツとかタオルをそこに掛けて乾かしている程度の温かさであ

るが、室内では厚手のセーター類は不要である。B&Bでは寝具は上シーツ、その上に毛糸で編んだケルト風の織物(スケスケで毛布のようなものではない)があるだけ。敷毛布も掛け毛布もない。新築住宅の建築現場を見ると、壁面はコンクリートブロック(厚さ10cm、40×60cm程度)が2列、その間に断熱材を挟み込んだ“コンクリート造り”となっている。この密封構造がかくも室内を快適にしているのだろう。

### 3. 交通などに関して

M25はロンドンの外環状道路で3~5車線×2の立派な道路。地方都市へは放射状に2~3車線×2の高速道路なみの一般道路が整備されている。M1、M2、A1、A2などと呼ばれる高速道路規格の一般道路がイギリス全土の主要都市を結んでいる。これらの道路と他道路との交差はロータリー方式が圧倒的に多い。ドライバーのマナーの良さとも相まって交通はまことにスムーズに処理されている。このロータリーに入る車は行く方向によって内側車線にしたり外側車線にしたりと臨機に対応しており、土地勘と運転に慣れていないとロータリーへの進入のタイミングは難しいと実感した。

列車の旅ではロンドン発着は別として、地方都市からの長距離移動時間は時刻表ではとても読めない。これは、イギリスの鉄道はロンドンから放射状に鉄路が延びているものの、10余りものターミナルが分散していて鉄路としてはリンクできていないからである。各ターミナルへの連絡はチューブと呼ばれる地下鉄になる。そのためロンドン経由の乗車券は購入できない。

乗車に際しては駅の案内所で聞けば即座に乗換駅・待ち時間・所要時分が記された2~3本の列車の候補を打ち

出し、座席指定も手配してくれる。列車の座席指定料金は不要で特急・普通の区分はない。列車によっては限定された駅への停車で所要時分の短い特急並みの列車がある。

駅の列車案内はモニター画面だけで発車ベルもない。列車は入って来て出て行くだけ。余韻が残る。このモニター画面は、列車が発車するホームが分かる全体の列車運行表示画面と、次にホームに到着・発車する列車にしか表示されない列車の停車駅表示画面の2つがある。これらを見て乗車する列車を確認することになるが、大きな駅では表示される情報量が多く、乗車する列車がどれなのか分かりにくい。なぜなら停車駅表示は列車の到着直前でなければ表示されないため、時間的余裕をもつか駅係員に聞くしかない。もちろん教えてはくれるが、概して普段の会話の調子で早口で言うから、なかなか聞き取りにくく、気分的余裕がなければ聞けない。

ここに記した事項は個人旅行ゆえにガイドもなく、気ままに旅したときに垣間見たイギリスの一側面であるが、筆者自身心情的なイギリス最良になってはいても、そのイギリス人の国民性を十分に知るまでには至ってはならず、その捉え方も皮相的である。しかし、筆者はかつて行政の立場で業務した経験からわが国の風習などとクールに照らして見てもまことに新鮮で、学ぶべき点は多々あると実感している。若い方が直接、外国の実態に触れられて新鮮に映る認識でもってわが国のシステムをより良くする提案者になり、実践者になれる機会をつくられることを期待するものである。

〈参考文献〉  
1)「イギリスは不思議だ」林望 平凡社



■写真9—最新型車両(Virgin Tr.) (ポーツマス サウスシー駅)



■写真10—旧形式の車両(South Cent.) (ブライトン駅)